

婦人の創造力

宮本百合子

青空文庫

題は「婦人の創造力」という、何となし難かしそうな題目ですけれども、話の内容はそうぎごちないものでなく、昔から女の人で小説を書いた人があります、そういう人の文学が日本の社会の歴史の中でどんな風に扱われて来たか、また婦人はどんな風に小説を書いて来たか、今日私どもはどんな小説を書きたいと思っているか、或は将来女の人があるような小説を書けるような世の中になつて行くだろうかという風なことを、お話してみたいと存じます。

女の人が文学の仕事をしたというとき、いちばん先に考えられるのは「源氏物語」です。「源氏物語」は立派な小説であり、紫式部がなかなか立派な小説家であったことは、作品を読めば分り

ます。けれども、その後の日本でこの作品がどんな風に扱われて来たかと考えて見ると、大変興味があります。昔から国文学者は「源氏物語」の立派さをいろいろな角度から研究して、ちようどヨーロッパでシェークスピア字引があるように、「源氏物語」の中に使われている言葉について、家の造作について、着物の色合について、一つの字引のようなものさえできているような研究がございます。けれども、日本の国家が文化政策の中で「源氏物語」をどんなに評価して来たかと考えると、意味深い面白さがあります。

先頃まで、日本というものは世界でいちばん偉い国だという風に支配者は吹聴しておりました。世界でいちばん偉い国が、自分

の文化を世界に誇らねばならないとき、どういう文学を誇ったらいいのでしょうか。偉い人たちが考えた結果「源氏物語」は、ともかくその内容も、様式も世界文学に類のないものだから、あれがいちばんいいと考えて、外務省の国際文化振興会ですか、ああいうところで「源氏物語」をいろいろな形で断片的にも紹介しました。この間ソヴェトの作家シーモノフ氏に会いましたとき、日本の文学について何を知っているらしいやいますかと訊ねたら、「源氏物語」を知っているということですよ。それは、大変珍しいものを知っているらしいやる、どれだけ読みましたかという、ほんの抜萃のようなもので、日本文学の代表として紹介されているものを読んでおられました。ソヴェトの作家でさえそうですから、

他の外国では「源氏物語」という名だけは、或は有名になったでしょうけれども、その文学としての実体は、本当に理解されていなかったのだと思います。今までの日本の対外文化政策で、「源氏物語」という作品をどういう風に紹介したかといえば、あの作品は日本の十一世紀頃に書かれたものであって、その作者である紫式部という女性は、藤原家出身の中宮が、政策のために自分の周囲に文学の才能ある婦人を召しかかえた、その宮女の一人であつたという現実を率直に語りはしなかったでしょう。紫式部はこれだけの天才を持ちながら、歴史の中では藤原氏の一族中の末流の家に生れたことは分っているが、何子といったのか本当の名前は分っていません。紫式部というのは、女官としての宮廷の

名です。女流文学の隆盛期と云われた王朝時代、一般の婦人の社会的な地位は、不安で低いものでした。その中から、こういう小説を書いた。そして紫式部が書いた小説にはなかなか立派な描写があるし、同時に彼女の生きた時代の女のはかない生き方、大變に風流のように、美しくそうではありませんけれども、実際には、婦人の独立を守る経済基礎は全くなくて、男まかせの憐れなはない女の状態を、女として、女のために苦しく気の毒に思っている。その作者の真面目な心も一貫して流れている物語です。

日本の役人の文化政策は、「源氏物語」一つを例にとつてもそういう社会的な背景、作品の社会的な意味をはつきり知らせて紹介しているではありませんでした。ただ古典中の大變立派な文

学で日本の誇りである、あなたがたの国に、女性によつて書かれたこういう誇るべき文学があるか、という風に出されたのです。十一世紀以後の日本が封建的な社会制度をどういう風に変えて来たか、或は、どの程度までしか変える力がなかったか、その歴史の推移の中で今日紫式部の生涯はどう理解されているか、つまり日本の歴史の中で婦人の生活はどう推移して来ているかということなどには、触れずに紹介している。そうなると紫式部も「源氏物語」も、つまりは宙に浮いてしまいます。文学を、歴史やその作品の生まれた社会からきりはなして見ることは本当の文学の鑑賞の仕方、読み方でもないし、或は自分の好きか嫌いかを決める標準としても不十分です。

もう一つ別の例を考えて見ましょう。イタリーをムツソリーニのファシズムの政権が支配してから、私ども日本へもレオナルド・ダ・ヴィンチ、ダンテなどをイタリー文化の華としてたくさんお金をかけ、大規模な展覧会まで組織して紹介されました。ファシズムのイタリーが、どうしてレオナルド・ダ・ヴィンチやダンテなどばかりを担いだのでしょうか。ナチス・ドイツが、なぜゲーテばかりをあのように担いだのでしょうか。そして、軍閥封建の日本で、どうして「源氏物語」ばかり世界に押出し、紫式部以後の日本の社会で婦人がどんなに生きて来ているか、婦人たちがどんな文化上の仕事をして来ているかということを人間の生活の発展の歴史として紹介しようとしなかったのでしょうか。誤った民族主

義や民族の自負心というものは、自分の民族の歴史を公平に判断し、その中から親切に民族にとって値打のある様々のものを発見してそれを世界に紹介するという態度をもたせません。いつも、自分の方にはこういうものがある、どうだ、という誇示した形でそれを示します。自分の歴史に科学的な客観的な評価がもてないのです。なるほど、レオナルド・ダ・ヴィンチは、ルネッサンス時代の大天才の一人であり、その総合的な独創性は冠絶したものです。ダンテにしても、「神曲」は空想とリアリズムの混った独特な作品ですけれども、これらの人々から後、イタリーの民衆は営々として数世紀を生活しつづけて来ております。そして、マルコニーのように人類に貢献した発明家や卓越した何人かの音楽家、

作家にしてもボツカチオのように市民社会の擡頭期を代表する立派な作家もありました。イタリー人の歴史の中には、たくさん立派な人が出ております。しかし、ファシズムは、主観的な、独裁の立場から、そういう風に本当の民族の宝を歴史の段階に応じて掘り出して、それを今日に生かすという角度から自分達の民族の歴史を見る能力をもっていませんでした。世界に対して自分だけが号令をかけようとしたばかりか、自分の民族に対しても文化独裁の号令をかけました。それには、誰にも一通り異存のない、民族の誇りという単純な固定した標準を押しつけて来た。こういう点から考えてみると、日本の最近数年間に「源氏物語」が官製翻訳され、文化上の偉い婦人作家といえは紫式部にきまったものの

ように扱われていたということに、却つて、日本の文化がどんなに創造力を失い、圧しつけられ、文化史としての新しい頁を空^{ブラン}白にされていたかという、重大な文化上の問題があらわれているのです。

ところで、近代になつてからの婦人作家の立場、婦人の文学はどういうものであつたか。樋口一葉をとつて見ましよう。一葉は明治の初め、自然主義が起ろうとする頃、それに対抗して活潑な文芸批評などを行つていた森鷗外を先頭とし、若い島崎藤村その他によつて紹介されたヨーロッパのロマンティズムの影響をうけながら、一葉自身がもつていた日本風の昔気質のような気分――美しいけれども狭い、狭いけれどもやはり美しいという風な一

つの境地をもった文学に完成しました。まだ深く封建的な眠りがのこっていて、しかし半分目覚めている気持がヨーロッパのロマンティズムと大変うまく結合して、美しい「たけくらべ」という小説ができました。この作品をたとえば、昨夜の露が葉末について、太陽が輝き初めるとそれが非常に美しく光る、しかしそれは消えて行く露である、そういう風な美しさ、美しさとしては「たけくらべ」は完成しています。一葉も大変代表的な立派な作家という風に見られております。けれども、一葉の時代はまだ日本にジャーナリズムが僅かしか発達していませんでした。『新小説』だとか、春陽堂から出ている『文芸倶楽部』とか——後には大變通俗的になったけれども、露伴だとか一流の作家たちも当

時は『文芸倶楽部』なんかに書いたわけです。その頃婦人作家が擡頭して大塚楠緒子とかいろいろな人がいて、やはり芸術的な力では一応の作家だったけれども、当時の社会ではまだ文化が低かったから、それでもって食べて行くことはできませんでした。今日古い雑誌を見ますと、当時の婦人作家を集めて『文芸倶楽部』が特輯号を出していますが、そのお礼には何を上げたかというところ、簪一本とか、半襟一掛とか帶留一本とかいうお礼の仕方をしていきます。そんな風に婦人の文学的活動は生活を立てて行く社会的な問題でなく、趣味とか余技のように見られていました。一葉なんか大変に面白いことは、一方に「たけくらべ」のような作品もありますけれども、日記を読むとなかなか気骨のある婦人でした。

御承知の通り大変に困難な日常生活をして、駄菓子屋までやるような生活をしていましたから、歌のお師匠さんの所へ出入りしても半分事務のようなことを手伝って教えて貰っています。そこで貴族的な女の人たちと一緒に歌の会があるときには、一葉は何時も腹の立つような思いをしました。そういう女たちは我儘で得手勝手で、名誉心が強く、一葉の才気を憎らしがってお嬢さんらしい図々しきで押しつける。それに対して一葉は憤慨しています。向島のお茶の席のような所に歌の会があつて、きれいな着物を着て行つた。——その頃はいまと違ってそういう所へ行くには三枚重ねの縮緬の着物を着て振袖で車を並べて行つたもので、一葉も借着をして行く。やつと体裁を繕つて、自分の生活や気持とは大

変に離れた環境の中で風流らしい歌も詠^よんで、帰って来ると、自分の心を抑えることができないで憤慨する。日記の中で、そういう女の人達に混って食うに食えないような自分、着物さえも借着である、そして、お追従を云いながらあの人たちの中に入っていないかならないのか、馬鹿らしいことだ、口惜しいことだと憤慨しています。自分の働いて生きて行く女としての立場、それから自分のように努力もしないし、熱心に文学の仕事をするのでもないただの平凡な男が男であるばかりで役人になって——あの頃は役人万能の時代だったから、正四位とかけちくさい私どもにわかりもしないような位を貰って、立派な着物を着たり、金時計を持つて——漱石の「猫」でも金時計を書いていますね、金時計が

一つのシンボルになった時代があります。——けれど私は陋屋の中で小説を書いている。女はつまらない、男は愚か者でも世の中を渡って行くのに、と一葉は或る自己批評をして、こんな苦しい生活を止めてしまおうかと思ったことさえあった。そんなに憤慨して熱血迸るというところがある。それなのに小説をお読みになれば分るように、「たけくらべ」「にぎりえ」のようなものに女の憤慨を漏れていますけれども、一葉はその時代の婦人の文学というものの考え方、いろいろなものに支配されて自分の憤慨している気持、向島の歌会の風流の中で憤慨して苦しく思った気持、それをその儘あれだけ立派な文章の書ける筆で書かなかった。若し一葉がそういう気持を小説として書いたならば、あの時代とし

たら全く新しい小説、新しい明治の女の小説であつた。しかし、一葉はやはり自分の持つてゐる社会に対する理解から文学というものをも一つの風情としています。一つの凜^{りん}とした形として自分の文学の中に表現して、人にも訴え、人の心の中にもその欲望がある、人の生活の中にも条件がある、お互いの生活に共通しているもの、それを感じることができなかったわけです。

その後、大正の頃になってからは、御承知の通り第一次のヨーロッパ戦争で日本にも資本主義が急に発達したから出版業も大きく拡がった。それは円本の流行を御覧になつても分ります。改造社という所は、あの頃もりもり大きくなり、講談社はあの頃から戦争犯罪人になるほど儲け初めた。だんだんいろいろな所で大き

な出版をやるようになりました。そうして作家の生活も非常に変わって来ました。その変り方を申しますと、いろいろ面白い点がありますけれども、婦人作家のことだけに限って言えば、つまりこういう風な出版は、結局に於ては自分が金を儲けるのが眼目です。どんなに立派なことをいっても金を儲けることが目的で、婦人作家を強大にするにしろ自分の利益と見合せてのことです。一番ひどい場合は、今から七、八年前になりますか、女の作家が非常にたくさんいろいろの仕事をした時代がありますが、ちょうど太平洋戦争の前の時期で、女の人は一所懸命にいい小説を書きたいという努力からいわゆる婦人作家といわれるものが登場して来ていろいろな雑誌にたくさんものを書くようになった。数から申し

まずと明治の一葉の時代の一つの大変注目すべき時期と同じように婦人作家の数が殖^ふえて大変にたくさん書くようになりました。ところが、そういうときに女の人の作品に対する男の作家の評価と申しますか、文学の中の婦人の文学をどう評価したかという問題になると、そこにはやはり一つの問題があつて、婦人作家は作品の中に女らしいものを要求された。女らしいということは、女ですからどんなに男の中へ入っても女は女です。つまり防空演習のときに梯子に登つても、爆弾が落ちたとき何を被つて逃げたとして女は女である。別にそんなに女々といわなくとも自然に女は女の可愛いところがある筈です。文学評価の中にへんに女っぽいことを持込む必要はないのです。女らしい女心、女の心ですから女

心になりますけれども、同じことをいっても女の声は自然にソプラノになるのだから。女はまた女の持っている特殊な社会状態があるから男の知らない状態もたくさんあるわけです。それを正面から女らしさという問題で片づけるのではなくて、女がどんな人間であるか、男と同じように、この世に幸福を求めて幸せになつて一生の値打を發揮して安心して働いて生きて行きたいという、男と共通の人間らしい心を先ず認めて欲しい。別に意識的にソプラノを歌うのではなく、人間の声を出せば女は自然にソプラノとして出て来る。そのように文学は生活の声であり、心の声、思いの歌である。女が歌えばソプラノにもアルトにもなるけれども、それは女の芸当ではない、もつと真面目なものです。ですから、或

る時代に婦人作家が大変に擡頭した場合にも、真面目な婦人作家は苦しみました。それは妙な女つぽさを要求されたからです。ぎつくばらんにいえば、婦人で画を描く人、婦人で小説を書く人は、なんだか普通の女の人と服装なりから、見たところから違う、なんとなく一風変った風になってしまします。それは生活が普通の女の人よりも少し自由であり自分というものを主張しているのですから、服装にもすべてにも現れるということはありませんけれども、或る意味ではそれを自分から誇張するような立場に入る。そのために、女の人の文学がそれほど数が殖えた時代でさえも、女の人が真面目な婦人の社会的な問題について闘う態度、喧嘩腰ではないにしろ、真面目にその人がそれを求めているということが強く

強く主張されるように理解されるように心を打つ文学、そういう風なものが少く、縫取りしたもの、やはり女細工で色どりがきれいでしなやかな、あつてもなくても日本の文学が前進しなかったもの、つまり飾りが殖えたもの、そういうものが多かった。そういう時代に、たとえば極く新しい人として、作家にならない時代の豊田正子さんとか、野沢富美子さんとかいう人が出ました。野沢さんも、豊田さんも才能のある人で、生活にすっかりくつきたいいい素質を持っている人です。それをどういう風にジャーナリズムの関係では利用されたか、豊田さんは「綴方教室」で有名になったけれども、本当にあの人を立派な作家として育てて行くために何をしたでしょう。中央公論社は小説を出して儲けて社会的

の一つの機会を与えただけで後はそのままです。野沢富美子さんの「煉瓦女工」はこの頃になつて映画にもなっているけれども、第一公論社は野沢さんを買ったような所があります。そういう風にして、立派な才能、或はよくなる才能でも、商売と結びついた文学の中では非常に純粹に立派に伸ばすという真面目な氣持をもつて扱われにくい。商売の本性はそういうものです。

それがもつと悲惨なことになつたのは、婦人の文学ばかりではありませんけれども、戦争が始まつて以後、最近の終戦までの間の文学です。この間の日本の文学の在り方はどうであつたか。作家が腰抜けだつたということもいえます。しかし日本の作家はヨーロッパの作家よりも日本の經濟基礎が薄弱なため文學上の經濟

的条件が悪いからその日暮しです。家族を養って行くためには食わねばならぬ。食うためには、月給取ではないから書かねばならない。書くのは何か、天に向って書くわけではない。紙にペンで書き、その書いたものが印刷されねばなりません。印刷はどういう過程でされるかといえ、やはり商売の雑誌、ジャーナリズムの上に発表される。そのために出版業者は情報局の忌諱ききに触れるものを出したら睨まれて潰されるかも知れないからぐにやぐにやになって、できるだけ情報局のお気に入るようなものになって存在しようとする。そういうものに作品を載せねばならないとすれば、腹が立ちながらも、割りきれないものを感じながらも、或る程度追隨して行かねばなりません。日本の最近の実に野蠻極まる

文化の墮落で、男の作家は勿論のこと、女の作家でも非常に困難な状態になった。その人が悪いということではなく、そういう風な全体の仕組みのために作家は辛い状態におかれました。それと闘うことができないほど上からの圧迫があり、治安維持法は恐ろしいものだった。それに対して女の作家も十分な闘いをする事ができませんでした。それでみんな大変苦しい状態を過して、そういう歴史を経て、今日私どもの日本ではやっと民主化という声が始まりました。明治以来、初めてめいめいが一人の人民として生きて行く権利があり、自分が感ずることを正直に述べてよい権利があり、書いてよい権利があり、社会を自分達のものとしてよくして行き、明るく愉快にして行く、それでよろしいのだという時

代が始まって来ました。ですから、文学もここで改めて考え直さなければならぬ。日本の民主主義の文学、民主的な文学の伝統は明治以来決してなかったわけではありません。第一、明治の初めはフランスの影響を受けて自由民権の思想が盛んで、男も女も一人の人民として平等の権利を持つて社会を建設して行くべきだという観念があつて、その頃の女は男と同じ教育程度を持つようになつていた。けれども、明治二十二年に憲法発布になつて、日本は封建をひっくりかえして新しい日本になつた筈だけれども、憲法が発布されると同時に、元の封建の方が都合がいいと思つてだんだんそういう風になつた。女教育も女学校が三十二年かにできて、女は内助者としての学問があればいいということに文部

省で決めました。ですから、女の教育程度は明治の初めにおいては高かった、文学をつくる素質も高かった。そうして自分の能力を発揮することもできました。けれどもその後は男がつくって行く世の中で、男の損にならない程度に利巧であつて男の邪魔にならない程度に馬鹿であるという女を要求しました。ちょうど日本の政府が徳川時代からの農民をそのまま小作人にして置いて——徳川時代には百姓は生かすべからず殺すべからず、はつきり生きればいろいろ文句をいうし、殺してしまえば働かないからといった考え方だったのと同じです。女というものもそれに似たようなもので、あんまり馬鹿でも困るが利巧すぎても厄介だという風にしてやって来た。そのため婦人の民主的な文学というものは婦人

自身の中には非常に僅かしか芽生えないで、そのあとは進歩的な男の人達が文化全体の問題として問題にしました。

一葉の時代でも或る種類の——内田魯庵という風な評論家たちはやはり一葉なんかの文学に対していろいろ疑問を持っていたけれども、平塚雷鳥の出た明治四十年頃、青鞥社の時代という頃には女の人自身が自分達で自分達の才能を発揮するようにという希望で婦人の才能を押し出そうとしました。ところが、その時代はまだ婦人のそういう風な才能を押し出すということはその人が社会的に本当に独立していなければ成り立たない、親の脛をかじって気焰を上げて駄目だということが分つていませんでした。そのために平塚さんたちの青鞥社の運動も或る種類の僅かな人、たとえ

ば野上彌生子さんのような人は後には青鞥社から離れたけれどもあの時代に出た人です。青鞥社の全体の方から申しますと、はっきりした社会的基礎をその人達が持っておりませんでしたから、雷鳥さんは年をとってしまつて大本教の信者になった。社会の中にはつきり自分を密着させていなかったからです。

今から十何年か前に、世界と一緒に日本の民主的な文学運動——その頃はその時代の或る歴史的な理解からプロレタリア文学といわれたけれども、しかし根本は今日私どもが求めていると同じように、人間は人間らしく生きよう、人間の声は十分出されていもの、そうして美しいものをつくつて行こう、ということを中心とした文学運動——がおこりました。その方向は、やはり民主主

義的な基礎に立っていますから、婦人も特に男より劣ったものは考えない。却って婦人が今までたとえば小学校教員でも女の教員は月給が初めから安く、且つ永久に安い、たとえば五円でも安くなければ気が済まないという有様で、各官庁会社に勤めている婦人達もそうでした。あの人がいなければちよつと困るという位置の人でも地位は男より低い。古い古い女の人を見ると、うちの国宝だとか、生字引だとか、女でないものになったような扱いをする。そういうことから、苦しくて罷めてしまうという場合もある。それから家庭における女の人がやはりあまり利巧でも困るが馬鹿でも困るというひどい扱いを受けている。そういうことに対して女の人の十分な声、十分な立場、女が幸福であれば男も幸福であ

るというそういうことを主張していた佐多稲子さん、平林たい子さんのような人達、このような人達は女というものは男よりも決して劣ったものでなく、劣っているとすれば、今までの永い歴史の中に女のおかれていた社会的な地位、そういうものが女を苦しめ低くし、同時にそれが男をも苦しく低いものとした、だから男と女とは援け合って生活全体をよくして行かねばならないという立場に立っている人達、そういう時代に出た婦人作家達も、歴史的な素質を持っています。こういう人の小説は新しいはつきりした日本の歴史における社会的地位を持っています。

戦争の間はみんなひどい目に遭いました。誰でもその時樂をした人はありません。それで、今日になって初めて自分達の口を抑

えていたものがとれて、なにかというと私どもの手からペンを取上げて牢屋へぶち込んだそういう力はなくなつた。今こそ私どもは日本全体が新しい民主的な日本になろうとする喜びの中に全身的に参加して行くという熱情を持っています。婦人参政権は文学という問題と違うけれども、政治は毎日の生活を処理して行くものであります、この頃のどさくさで金を儲けている人間もあるが、しかしわれわれはやはり困っています。そういうことについて現実の生活が教えている以上、一葉が文学と生活を一つものと理解することができなかつた歴史に鑑みて、一葉が才能があつたかなかつたかの問題でなしに、今日私どもは一葉より才能が少いかも知れないが、しかし私ども全体はこのゼネレーションというもの

に誇りを持っています。今日の世界に生き、今日の日本に生きて
いるという誇りと献身的な情熱を持っています。

それは、あなた方が今日話を聴きにおいになるそのお心持の
中にはいろいろな好奇心もあつたかも知れないし、久し振りだか
らこんな話も聴いていいという気持があつたかも知れませんか
ども、いちばん根本は何か、やはり話している人達と同じように
生きている値打、生きている喜び、悩みをはつきり自分で知りた
いという気持だと思っています。自分の心にあるものを私どもは話す、
受けて応えるこだまこだまの美しさ、そういうものを求めて来て
いらつしやると想像します。

あなた方一人一人は英雄ではないでしょう。私どもが一葉より

文学に於て才能が劣っているかも知れない。しかし歴史は新しい、皆さんの素質は新しい。あなた方はとくに英雄ではないでしょう。或は貧乏な人もありましょう。自分の手紙を書くのも億おっくう劫な人かも知れない。どんなにマルクスが偉くてもマルクスの生きていた時代ではありません。どんなに小さくても、私どもはその「資本論」を読んで自分たちの生活を改善して行くことができる、そういう条件下におかれている小さい一人一人です。けれども小さい一人一人の持っている新しさ、美しさ、真実さ、闘って行く力、自分の生活を築いて行く力、それがこれからの文学です。新日本文学、新日本文学会と皆新がついています。この頃新の字が何にでもよくついている。しかし、百万の新ができたとして驚かない。

何故ならば本当に新しいものになろうとすれば皆新の字がつくべきです。あなた方自身も自分の新しい今日、明日の新しい日本を創り出すために熱心に生きていらつしやる。お互いつくつて行く文学は実際的な内容です。ですから文学が一つの画に描いた餅のように腹のたしにならないようなものにはならない。腹の空いたとき腹がなぜ空くかということがわかる、この腹の空いた嫌な気分を何処に持つて行くかということがわかれば腹が空いたのも忘れて笑う。こういう生き方もまたわかる。そういうようなものが私どもの文学です。そういう意味では、男の作家も女の作家も表面上区別はありません。先程申上げたぐにやぐにやした女心など一つも必要としません。女は女として生れているから、お婆さん

になつても女の可愛らしさ、女の美しさが。男はお爺さんになつても男の雄々しき立派さというものがある。そういう風な素直なあるがままの人間として、熱心に真面目に生きて行く人間としての文学、そういう情熱の溢れるものとしての文学、お互いがお互いの言葉として話せる文学、そういうものを求めているわけです。ただ文学は一つの技術が要りますから、いきなり誰でもここにいらつしやる方みんなが小説を書くことはできません。しかし、文学というものは師匠がなくても済む、これは一つの面白い特徴だと思います。皆さんどんな人でも一生のうちに手紙を書かない人はないでしょう。十五、六歳に誰しも日記を書き始めたくなつて書きます。一生続ける人もあるし、途中で止めてしまう人もあ

るけれど。況^ましてこの戦争では夫を或は子供を戦線に送った人々は皆手紙を書いています。あれは一つの文学的な歩みからいうと日本人というものがものを書くということについての大きな訓練だったと見るができます。人間の心の話としての文学の端緒はそこにある。だから文学は師匠が要らない。ところが音楽になると、声を出すこと、譜を読むこと、指を大変早くピアノの上を滑らす技術、そういうものがたくさん分量を占めていて、どうしても先生がなくてはならないから、金持に独占されます。しかし文学は先生なしに、手紙を書き、日記を書き、恋文を書くことの中に心の声が歌い出すから、私どもにとつては、文学は生活に織込まれた芸術です。この文学の勉強のためには学校なんかいく

らあっても役に立ちません。大学を卒業したからといって小説が書けるものではない。小説や歌をつくることは生活と心を結びつけて表現して行くのであって、個人の持っている天性の力もあるけれども、社会が十分にそれを認めて、どんなへんない方でもそのいい方の中にはその人の生活があり、私どものその時の生活が反映されているものとしてすくい上げて行く力、それがあれば、いたわられて社会の中に私共は伸びることができるのです。今までのように何を言ってもいけない、何を書いてもいけない、お前たちは黙って死んで行け、さもないければ牢屋へ放り込むというのは自分たちの声を発揮することはできません。これから新日本文学会なんかで計画しているいろいろな文学の集り、たとえばこ

ういう集りもございますけれども、また小規模な書いたものを持ち合つて研究する集りもできます。雑誌も作るし、いろいろな程度の高い文学的作品もできていいし、ごく初歩的な手刷りのもの、原稿紙を綴り合せてお互いに見て廻るという初歩的なものでもいいから表現して書いて現わす。電車の中でいろいろな出来事を見た場合、それを一つ日記に書くのでも、書くとなればもう一ぺん考えます。あの時あの女は「潰れますよ」と怒鳴っていた、そういえばひどいことだ、ひどいことといえは治安維持法がなくなつてもまだまだ不合理はある、子供が電車の中で潰されて殺されたらその責任は親にあるなんてなんというひどいことだろうと考えます。しかし女なんて不思議なものだ、民法で妻は無能力者にな

っている、女は結婚すると無能力者になってしまう。一家を賄っているのに、自分で家を建てることも、借金もできない。しかし刑法では女は十分能力あるものとしている。そうして子供を電車で潰されたという女にとって不仕合せな事柄が過失殺人罪として罰せられる。これは輿論が喧しくて罰しきれませんでした、一方では無能力者であり、不幸になった時だけ能力者になっている。惨い話です。そういう風な一つの「潰れてしまいますよ」という声から私どもはそこまでだんだん考えて行くことができます。こうやって話している時にはいろいろな声を出して話す。声を出して考えるということは苦痛です。やはり私どもは声を出さないで考えることが楽し、その方が深く入る。「助けて下さい」とい

う声一つの経験、これを机の前に坐つて考えて見ると、だんだんたぐつて行つて、深くなつて、自分の子供の時はお母さんにおぶさつて、こうだった、と子供の時の想い出さえも拡がります。ものを書くということは非常に面白いことだと思う。私どものいろいろな経験がただその時だけで過ぎてしまつて、紙鉄砲みたいに或る一つの所を向うへ出てしまえばお終いであるなら、人生はあまりに詰らない。どんな苦勞したとて甲斐がない。嬉しいことも甲斐がない。嬉しいこと腹の立つこと、すべてこれをもう一遍心の中へおき直して見ることは人生を二重に生きることになります。一生が五十年とすれば百年生きることだと立体的に考えることができます。またその時代にある女或は男が或る歴史的な条件の中

でどういう風に生きて来たかという一つの時代まで生き切ることが出来ます。私どもの命はたった一遍です。しかもたった一遍しかない命を私どもはあれだけ怖い空襲などでやっと拾って来ているのです。しかもいまのように食えないとき随分骨を折って食べて生活しています。この命は値打が高い。決して一遍きり、スフみたいに使ったら棄てるなんて命じゃない、繰返し繰返し生きて行かなければなりません。そのためには私どもは立体的に生きるしかありません。立体的に生きるということは、そういう風に自分の生きた喜び悲しみというものをもう一遍深く深く噛み直して二倍にも三倍にもして自分が一人の人間として生きて行くこと、それをまた社会に広めることです。自分達お互いがよく生き

ようとする希望、お互いに信頼してはつきりと生きて行こうという希望、新しい文学の明るい面、ナンセンスではない明るさ、馬鹿笑いでない高笑い、愉快的足どり、一つの希望に結びつけて来る努力、その努力を尊重する気持、前進する気持です。ですから、女の人のこれから書くものに私もは期待します。何故ならば、労働組合ができてたくさん の権利を持つようになります。そして自分たちの時間がいくらかできます。そうすれば職場にいる女の人たちは今までただ受入れるだけで吉屋さんの小説、女が低いものであるという上に立って書かれたものを有難く読んでいたのを、自分たちで何かしら日記にでも書くようになるでしょう。それはやはり労働時間の短縮とか生理休暇があるとか、労働条件がよく

なることと結びつく。あなた方の配給がもう少しよくなったら家庭の主婦も随分時間が出るでしょう。いろいろ女の参政権などの問題のために会合があつても家庭の主婦は出られない、若い人か或る特別の人たちしか出られません。本気になって生きるということを考える主婦が演説なんか聴きに行くことができれば、真面目に苦勞しているから、真面目に生活や政治をよくするということを考えて話を聴くことができます。ところが家庭の主婦は今まで出て来られません。何故ならば配給とか、闇買いとか、生きるために大童になつていからです。もう少し食糧問題を解決し住宅問題を解決すれば、女も男も時間ができます。時間に余裕ができれば本を読むことも考えることもできます。そういう風にして日

本が民主化するということは非常に大きいことです。それは私も一人一人が自分たちの命を十分に値打のあるものとして生きて行く方法が立つという可能性ができるということなのです。どんな人でも自分たちがいいかげんになってすぎるということは望みません。私もは生きること、それを自分たちのものとして行かねばならない。だから文学というものでも、ここにいらつしやる以上は身に近いものとしてお考えになっていらつしやる方でしうけれども、或る人達が中心になって拵えるものを文学と思つている今までの考え方をやめて、やはり生活というものに手を入れて掬い上げたものが文学である、憤慨、笑い、いろいろな感情がある、それが文学だということを周囲の人達にもだんだん拡げて

いただければ、新しい日本のためにも生活そのものの向上となり、生活の向上ということから起る文学の向上、そういうことになると思います。

時間がないので尻切れとんぼになりますけれども、私の話としてはそれだけにしますが、今日窪川鶴次郎さんが来て、小林多喜二の話を申上げる予定でしたが病気で来られなくなりました。二月という月は私どもにとって忘れられない月です。小林多喜二という小説家は二月二十日に築地の警察で殴り殺されてしまいました。それですから今日私どもはこういう催をしても小林多喜二を忘れていません。小林多喜二があれだけの作品を書きまして、お読みになっという方が多いと思いますけれども、殺され

たその時に、日本のたくさんの方文学者はどういう風に申したか、小林多喜二は若し政治活動しなければ——つまり共産党なんかに関係しなければ殺されることはなかったし、自分の才能を全うして最後まで小説を書いておられた、あれを殺したのは共産党だという風にいいました。小林多喜二という立派な世界に誇るべき文学的才能を持った男を殺したのは日本の共産党の間違った文化に対する態度だと。ところがそういうことをいったいろいろな批評家たちは今日も生きております。そうして恐ろしい戦争の時代を通過して、小林多喜二が生きて闘ったものはどれほど残酷なものであり、どういう意味において小林がそれと闘われたものであるか、「蟹工船」なんかのようにどうという風にして労働する人の生

活が武力によって監視されているかということを書いてある、それを何と思って読んだでしょう。それから去年の十月に治安維持法が撤廃され、みなさんもラジオなどで、今までの警察力、日本の恐ろしい野蛮な警察力がどんなに私ども人民の中から優秀な人を殺したかということをお聴きになったでしょう。十何年前小林多喜二を殺したのは日本の共産党だ、小林多喜二は死ななくてもよかったといった人々は何と違って治安維持法の撤廃を聴き、拷問の話の聴いたでしょう。あの人達はあの時になって初めて小林多喜二を殺したのは天皇制による野蛮な警察だということがありありわかった。若し正直な人達であれば慙愧ざんきに堪えないでしょう。ああいう風にして立派な人を死なせたその力はわれわれを墮落さ

せて碌な評論も書けない人間にしてしまったと反省するでしょう。しかし、そういう人達はそれを申しません。民主的な人間の生き方は、治安維持法が撤廃されたときいろいろな人が口やかましく申しました。横暴であつてはならない、思想の立場が違ったからといつて弾圧してはならない等々、しかし一寸人を怪我させても罪を与える警察があれほどの人間を殴り殺しても刑法上の罪に觸れなかつたのです。民主的な生き方とは、私どもが自分の正しいと信ずることのために自分がどこまでも曲つたものと闘つて行くことが当然であり、自分が正しいと思う生活をつくつて行くことであります。私どもが民主的に生きるならば、小林を殺した治安維持法のことをもう一遍考え直し、小林を殺した力と徹底的に闘

うということ、そのためには民主的な社会、民主的な文化というもので日本の隅っこにまだたくさんいる反動的な力を打砕かなければ私どもの人生は決して自由なものになりません。私どもの自由のために私どもは闘わなければならない。それは民主的な生活を樹てる第一の条件です。それからそのためにはいろいろな困難とか自分に対する痛い目、そういうものも自分が勇気をもって突破して進んでこそ人間一人の値打が発揮されます。今日小林多喜二の話をするときには、弾圧を受けたから可哀そうだという面からでなく、その力を突破して行く勇氣、人間の立派さ、そういうものを受継ぐべきであります。それで今日なお小林は生きている、死んでも死んでも死なない。結局は人間の値打、精神の値打、文

学の値打だと思っています。小林多喜二を記念するということはただデモをやつて、歌を唱つて旗でも振つて歩く、そんなことだけではありません。私も一人一人が民主的な人間であるという立場に立つて、文学の仕事や日常のすべてのこととして行く、差当つては最近迫っている総選挙においてめいめいの持つている一票を民主的なように生かすことが私どもの民主的な一つの行動だと思っています。

〔一九四六年二月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十三巻」新日本出版社

1979（昭和54）年11月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十一巻」河出書房

1952（昭和27）年5月発行

初出：同上

（新日本文学会主催の文芸講演会での講演速記から

1946（昭和21）年2月25日）

入力：柴田卓治

校正：米田進

2003年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

婦人の創造力

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>